

特集◎今、何が問題か

# 「アラブの春」が もたらしたもの

(東京大学先端科学技術研究センター准教授)

池内 恵

Satoshi Ikeuchi

1973年生まれ。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学。日本貿易振興会アジア経済研究所研究員、国際日本文化研究センター准教授、アレクサンドリア大学(エジプト)客員教授を経て、現職。専門はアラブ研究。著書に、『現代アラブの社会思想』(講談社)、『アラブ政治の今を読む』(中央公論新社)、『書物の運命』(文藝春秋)、『イスラーム世界の論じ方』(中央公論新社、サントリー学芸賞)など。

「アラブの春」の政治変動が展開し始めてから一年がたった。何らかの形で影響を受けなかったアラブの国はないと言って良いだろう。新たな情報空間を獲得した若者を主たる動因とする社会の側からの異議申し立ては、各国に共通した現象だが、影響の現れ方や、各国の政府の反応の仕方、当面の帰結や将来に抱える問題などは、国によって異なっている。動き始めた政治変革の波は当面収まらないだろう。より自由な政治参加を可能にする政

体の確立から、紛争や混乱まで、さまざまな可能性が考え得る。二〇一一年に口火を切ったアラブ政治変動のこれまでの進展を概念的に整理し、今後の展開の見通しをつけておきたい。

アラブ政治変動の諸現象は、ひとまとめに漠然と見るのではなく、次の四つの次元に切り分けてみて行く必要がある。第一は社会運動の次元である。インターネットの

新たな情報ツールを使いこなした若者を中心とする抗議行動や意思表明が活発化した。政権の動揺や崩壊に伴って社会の側からの政治的意思表示や参加の試みが可能になる空間はさらに広がっている。

第二は各国政治の次元である。社会からの異議申し立てに各国政府はそれぞれのやり方で対処し、当面の帰結が出ている。対応のあり方や帰結には偏差がある。その偏差を分けるのは主に各国の政治・社会体制の相違である。

第三に、この問題に関する地域国際政治の次元が現れている。アラブ諸国内では、文化的な共通性や言語・メディアの一体性から、ある国での政治的变化は容易に他国に影響を与える。そのような「呼应」や「連鎖」が生じると共に、その連鎖を妨げたり、逆に自国にとつて都合の良い方向に導くために加速しようとするといった、介入・干渉も、主権国家の枠を超えて行われることが当然とされている。このアラブ諸国間の地域政治に、さらにトルコやイランなど非アラブの域内大国も加わって、中東地域政治が活発化している。それが各国の現地の大規模デモのあり方にも、政権の対処の方策や持続性にも影

響を与え始めている。

第四に米国や英・仏、ロシア・中国など域外大国の関与であり、国連などを舞台に展開される国際政治である。域外大国がアラブ諸国に保持する権益や、石油の安定供給といった戦略的目標、地域紛争の激化の防止といった観点から、直接・間接に影響力を行使する次元が生じてきている。

諸事象をこのような次元に切り分ける視点を身につけた上で、社会運動が各国の政権の動揺をもたらし、政府の反応が体制の崩壊や維持や持続という帰結に至り、地域国際政治と域外大国や国際機関が絡んだ地政学的な駆け引きが展開する、アラブ政変のダイナミズムを見て行きたい。

### 人口と情報——メディア環境の累積的变化

リビアやシリアなど、地域大国・域外大国の外交や地政学的要因が注目されがちなる事例が出てからは、「アラブの春」全体の根本的な原因である社会運動の次元についての関心が薄れがちだ。しかし真の動因は社会の側に